博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　風間　伸次郎

学位申請者　スリ ブディ レスタリ

論　文　名　ジャワ語の敬語に関する記述的研究 —第三者敬語を中心に—

結論

レスタリ氏から提出された学位請求論文『ジャワ語の敬語に関する記述的研究 —第三者敬語を中心に—』について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は風間を主査に、副査として学外から明海大学教授井上史雄氏、アジア・アフリカ言語文化研究所より准教授塩原朝子氏、学内からさらに早津恵美子教授、川村大准教授を加えた5名で構成された。

論文の概要

本論文は、第三者に対する敬語使用の分析を通じて、現代ジャワ語の敬語の諸特徴と現在進行中の敬語の変化の様相を明らかにした社会言語学的な研究である。日本語の敬語研究史で広く採用されている「絶対敬語」と「相対敬語」という枠組みを通してジャワ語の第三者敬語の現象を捉え、さらには通言語的な観点からジャワ語における敬語の変化の流れを推測している。

本論文は分析と考察の内容から、大きく 3 つの部分に分かれており、そのそれぞれで従来の研究水準を超える成果をあげている。第1に理論編では、複雑であるとされているジャワ語の敬語体系を、日本語の敬語研究で用いられる「対者敬語」と「素材敬語」という概念を導入することで再整理する（第2章）。第2に文献資料編では、敬語体系の全体を把握するために、敬語を対者敬語と素材敬語に分け、第三者に対する敬語の使用特徴を明らかにする。これまでのジャワ語研究では第三者敬語に関する問題は扱われてこなかったため、教科書や雑誌など、書かれた言語資料を用いて第三者に対する敬語使用の規範を探っている（第3章と第4章）。第3に社会調査編では、文献資料の分析によって明らかになった第三者への敬語使用が、実際の日常会話においてどのように実現しているかについて、アンケートおよび面接を用いた実態調査で明らかにしている（第 6 章～第 8 章）。各章は、それぞれ以下のような構成になっている。

1．理論編。第 1 章では、研究の背景と目的、ジャワ語の概説と概況ならびに社会言語的状況、研究の対象、研究方法などについて述べている。

第 2 章ではジャワ語の敬語体系を包括的に説明している。主として語彙の取り換えによ

るその体系について、先行研究に基づいて、敬語語彙の構成、丁寧さの段階、敬語の発生に関する議論などをまとめている。先行研究の検討では、これまでの研究がジャワ語の敬語を対者敬語の観点からしか扱ってこなかったことを示した。そして先行研究が敬語分類で挙げている用例は、対者敬語と素材敬語の分類の枠組みの中に位置づけることにより、きれいに整理できることを示した。

2．文献資料編。第3章と第4章では小学校から高校までのジャワ語の教科書、そしてジャワ語の雑誌を対象に、メディアで見られる第三者敬語の使用を明らかにした。この2つの異なるメディアにおいては、ジャワ語の絶対敬語の特徴が顕著に現われている。例えば、小学校の教科書で生徒が先生と話す場面において自分の父親に言及する際に、父親に対して尊敬語を用いた用例が観察される。教科書が「子どもが学ぶべき知識」を盛り込んだものであるとすれば、そこに現れるこのような敬語の運用法も、現代ジャワの社会で正しいとされているものである。雑誌の分析結果からは、社会的に地位が高いとされている人物について書く際に、敬語が必須もしくは高頻度で用いられていることが分かる。第3章と第4章の分析から、どのような状況でも、そして聞き手が誰であっても上位者が絶対的に持ち上げられるような敬語体系が存在することが分かった。

第5章では、文学作品における敬語の使用を分析する。韻文資料と散文資料を用いる。これらの分析を通じて、ジャワ語の敬語が古い作品の中ではどのように現れているのかを明らかにする。ジャワ語の古い文学作品には敬語語彙が豊富に現れるが、今後これらをどのように分析していくかについても、さらに具体的な研究方法を提示する。

3．社会調査編。第6章では、メディアの分析から第三者敬語の運用法を確認し、それを基にした実態調査の結果をまとめた。この予備調査の結果からは、家庭内における既婚男女の絶対敬語的な特徴、そして高校生と大学生による第三者敬語不使用の傾向が窺える。尊敬語の語彙（Krama Inggil）のうち、機能が丁寧語化したものや敬意度が下がってきているものがあることも判明した。

第7章と第8章では、予備調査の結果を考慮に入れ、さらに社会人と高校生・大学生を対象に第2次調査を行いその結果を示した。この調査から、社会人のグループにおいては教科書と雑誌で観察されたような敬語の運用法が見られることが分かる。具体的には、聞き手敬語の使用/不使用と関係なく、第三者敬語の使用率が高い。一方、高校生と大学生においては、社会人で見られるような敬語使用の傾向があまり現われていない。これは、現代日本語の敬語でも観察されているが、第三者敬語が聞き手敬語と連動して用いられるものであり、いわゆる「第三者敬語の聞き手敬語化」の現象である。ジャワ語の若年層である高校生と大学生が現在の第三者敬語の運用法をこのまま身につけると仮定すると10年20年後には、ジャワ語の敬語が話し手と第三者との上下関係より聞き手への配慮が優先される敬語体系になっていくという可能性も予測できる。そして、これは日本語と韓国語の敬語変化の流れと一致していると考えられる。

第9章は全体の考察およびまとめであり、第10章「終章」では、結論と今後の課題について述べている。

審査の概要及び評価

上記のように氏の博士論文は、先行研究をよく整理しそれに対する問題提起を行った上で、教科書、雑誌、文学作品の分析、何度にも亘るアンケートなど、徹底した調査・研究によってジャワ語の敬語の全体像を明らかにしたものである。日本語のみならず他の言語の敬語も視野に入れた通言語的視点から、ジャワ語の敬語の本質の解明に迫っている。豊富な用例を提示し、稿末には資料的価値も高い敬語語彙リストを付している。これまでジャワ語の敬語の研究は、人類学者を中心に行われてきたため、実例を提示することなく、もっぱら研究者の観察や体験に基づいて記述・説明されてきた。本論文は、さまざまな資料や実態調査により多くの実例を示しつつ、ジャワ語の敬語の総合的な性格を描き出した初めての研究であるといえる。

本論文において、審査委員より高く評価されたのは、以下のような点である。

・第１に理論編では、日本語における敬語研究の枠組み（特に「素材敬語」と「対者敬語」など）や、ネウストプニーの通言語的変化傾向などをよく理解し、的確にこれを適用している。またその適用によって、先行研究に対して、より簡潔かつ合理的な体系を提示しており、世界の敬語論に貢献する新知見を含んでいる。
・第２に文献資料編では、規範的な言語使用をみせる教科書と、現状をよく反映した雑誌の分析に加え、古い文献も分析している。これはジャワ語の敬語研究において貢献するところが大きい。
・第３に社会調査編では、文献調査の結果を踏まえたアンケート調査を行い、多角的に調査・分析を行っている。アンケートは学生を対象にしたものばかりではなく、収集の難しい社会人のデータもよく集めている。
・論旨は明快であり、論の進め方も適切で、実証的である。
・グロスや表記など、ジャワ語の言語学的取り扱いもしっかりしている。

もちろん本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験において、審査委員からさまざまな質問、要望が出された。それらのうち、重要な点としては以下のようなものを挙げることができる。

・第１に理論編では、絶対敬語としての性格の一つのあらわれである自敬表現について、尊大表現としての性格、子供の立場にたっての使用、などの観点からもさらにその研究をすすめて欲しい。
・第２に文献資料編では、5 章（5.1.）の韻文資料による調査で冒頭の 7 章を対象にしているが、132 章全体を対象にして欲しかった。
・第３に社会調査編では、ngoko 体（普通体）内部における待遇的違いについても今後さらに研究をすすめて欲しい。
・録音からの書き起こしや、他の地域での実態調査もさらにすすめていって欲しい。
・アンケートに用いた動詞が少ない。動詞以外の品詞についても調査があるとよい。

・論文の構成に関して、絶対敬語の性格がよく出ている社会人についての調査結果を先にするなど、全体的視野から順序を再考するとよい。理論編と社会調査の関連付けも、もう少し丁寧になされるとよい。5章の古い資料による分析は全体からみるとやや異質である。

これらの指摘も、本論文の全体の価値に対しては何ら影響を与えるものではなく、むしろそのいくつかは本論文の意欲的な試みを認識した上で、さらに建設的な提言を行っているものである。

最終試験における上記のような質問、コメントに対しても、申請者の応答は的確なものであり、指摘された問題点を申請者がよく自覚し、今後それらを明らかにしていくのに十分な見通しと方法論を持っていることが確認された。また今後の課題の解明に申請者が強い意欲を持っていることも感じられた。

審査委員会は、最終試験（公開審査）の結果も踏まえ、慎重な審議を行った結果、上記のように、申請者 レスタリ氏の博士学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。